

救助

岩和田の部落は、遭難現場の田尻海岸から一里強、離れた処にある。岸壁の脇道を登って出た海岸沿いの道を左に行く。海縁を迂回するように、上がったたり下がったりしつつ行くと岩和田の浜に出る（岩和田、御宿海岸）。当時の村の人口は約三百人。半農、半漁の寒村。異国人遭難の知らせを受け、村では半鐘が打ち鳴らされていた。火事や船の遭難などの緊急事態に村民を集める早鐘である。現場を見てきた人の急な知らせに名主の岩瀬氏は、即座に全員を集め、現場に急行した。

異国人との遭遇は、村人にとって初めての経験。しかも当時の日本は準鎖国状態で、一悶着起きる可能性がある。言葉も通じない。だが、この名主は、まずは命を助けることだ。日本人も異国人もない。岩和田の海岸を汚すな。ここでは一人も死者を出してはならない。村民の漁師も海女さんもその意気に燃えていた。この辺りに、日本人が本来持つ、国際性

の血筋を見て取る事ができる。

田尻浜に村民が駆けつける。そこは大変な有様で、浜でゼイゼイ息を切らしながら血を流して倒れている者もいれば、同僚を担いで浜に辿り着こうと頑張っている者もいる。屈強な海の男は迷わず、海に飛び込み、溺れかかっている異国人を助けに向かった。波はまだ荒い。船の残骸が押し寄せている。破損した船が傾いて揺れている。海には、まだ大勢の人が助けを求めながら、波に揺れて、血を流し、疲れ果てている。

一晩中、水にもまれた身体は、外房の北風とも相まって、冷え切っている。浜に上がったものの、ぐったりと意識を失って横たわっている人もいる。「火を起こすのだ。たき火だ。おぼれかかっている人を一人も死なすな」。仁王立ちし、次々と下知を下す名主に応えて男女を問わず敏捷に救助活動を行う村の人々を見て、大勢の人に襲われたらどうしようとのロドリゴの危惧は、吹っ飛んだ。あの毅然

とした態度の名主がこの村のリーダーに違いない。同行の日本人を呼び寄せ、名主に近寄つた。「自分は、ヌエバ・エスパリーニャの総督でメキシコ・シテイというところに帰る途中に嵐に遭い、ここに座礁してしまいました」。一方の名主の方も、衣服はぼろぼろだが、その立ち振る舞いに漂う品格さをさつきから見ている、この人は相当、身分の高い人に相違ないと思つていた。「このようなことになつて心から同情するとともに哀悼の意を捧げます。我々は皆さん全員を救助します」。通訳を通じての名主のこの言葉を聞いたとき、ロドリゴには熱いものがこみ上げてきて、こんなことになつたが、日本に漂着したばかりか、こんなにもやさしい人々に遭遇し、自分達はなんと幸せなことかと再び神に感謝した。

しかし、ロドリゴの驚きは、こんなものではなかつた。人々は、冷え切つてぐつたりとした乗組員の身体を火の側に運ぶだけでなく、粗末な衣服を脱いで船員の身体を温め始

めたのである。なかでも妻や娘の海女さんが、裸になつて意識絶え絶えの船員に覆い被さり、身体を温め始めた行為を目の当たりにしたとき、ロドリゴの気持ちは天に達した。

■ I 御宿歴史博物館・メキシコ遭難救助の図

そこには、恥も外聞もなく、ただ冷え切つた異国人の身体を温め、助ける一心さが見て取れた。ロドリゴは日本人の、一寒村に過ぎない人々のこうした行為に感激した。やがて粗末な畑の収穫物であつたが、食料が運び込まれた。彼等ほうまいの、口に合わないのといつている場合ではなく、昨夜から何も食べてない空腹を満たし、むしゃぶりついた。浜では、大勢のけが人を酒で消毒し、緊急処置が施されていた。なんとという手際の良さか。

やがて、息も絶え絶えの人々が蘇生し、人々は次第に元気を回復し、神と村人に感謝した。中には涙を流し、村人の手を取つて、謝意を叫ぶ者もいる。言葉は分からないけれども、村人も「良かった」と口々に叫ぶ。中には涙

を流して異国人の手を握りしめる者もいる。結局、三百十七名が助かった。波にさらわれて溺死した者五十六名。もし、村民が救助しなければ、もつと多数の犠牲者を出したことであろう。船の破片がまだ漂っている。

救助した人々をこのまま浜風に晒しておくわけにはいかない。とにかく村に連れて帰ろう。村長の命令が下る。元気な者は案内し、崖道を上らせる。ふらふらの者やけが人は肩を貸し、登らせる。とても歩けそうにない人は数人係で担ぐように上げる。上の道に出ると村に向かつて一里有余の道を下っていく。ひとまず村の大宮寺（現大宮神社）に。さてそれからが大変である。なにしろ村の人口は三百人。ここに三百十七名の人々を収容するのであるから。名主が中心となつて各家に割り振る。名主の家は広いので比較的多人数だが、村人達はこの無理な注文を素直に受け入れ、いやむしろ進んで歓待した。

ロドリゴ達数十人は、村の中心にある大宮

寺に引き取られた。ロドリゴは、一息つくとも名主や寺の住職に改めて、自分の素性、遭難に至った経緯をくわしく説明した。ここでもメキシコに帰る同行の日本人がいたことが助かった。名主や住職は改めて同情の意を示し、この場所、御宿、岩和田の地理や、ここが領主、大多喜城の殿、本多忠朝の管理下にあることを説明した。彼等を生かすも殺すも、殿次第。しかし、私たちはできるだけのことはするとロドリゴを慰めた。大多喜城は岩和田の北西、約八里離れた山にある。名主はすぐさま異国人遭難と救助したこと、今後、どのように処遇したらよいかを大多喜城に連絡。下知を待った。

各村人の家々では、身体を清めさせ、けが人の治療をし、ご亭主の衣類を着せ、なげなしの食事を提供している。主に農作物、米、野菜、煮物、そして魚介類。そして酒を振る舞っている。誰もがうまいうまいと食べ、日本酒をこよなくうまいと飲んでいる。ロドリ

ゴも日本酒をワインに比肩するうまさだ……と見聞録に記す。

こうした村民の村を挙げての協力が結局三十七日間も続くことになる。貧村のため、自分達の食事を削つての支援もたちまち底を突く。

ロドリゴの心は落ち着いてくるに従い、涙が出るほど村人の振る舞いに感謝するとともに、今後どうなるのであるかという不安が再びもたげてきた。嘗てファイリピン総督として刑死寸前の複数日本人を助け、日本に送り返し、家康から感謝状を受けている。その意が届いているであろうか。だが、同時に日本に漂着した異国人が全員処罰されたとの風聞も聞く。

数日後、大多喜の殿からまず親切に接待せよとの知らせが来る。とすぐにロドリゴだけが名主や住職に呼び出されて、どうも城では全員死罪と決めたらしいとのことである。やはり、日本刀の錆になるのか。ロドリゴは覚

悟する。それから数日後、大多喜の殿が自ら村に出向いてくるとの知らせが入る。村人に助けられたものの、最早、これまでか。

知らせを受けた大多喜城では、連日会議。家来達は過去の例に従い、全員断罪に処すべし、殿のためですと衆議一決。ところが大多喜の若き殿は、これを一蹴し、逆に厚遇すべきである…と言い放つ。これは、前代未聞のことである。直ぐさま大多喜の殿、本多忠朝は、江戸城に事の次第と自分の考えをしたため、秀忠と家康の意見を求める早馬を出した。江戸城の二代將軍秀忠は、忠朝の意見に同調し、これまた即座に駿府の家康に知らせる。家康の意見は全面的に厚遇すべしということであった。

そんなことは知らない口ドリゴは、大多喜の殿の来訪までまさに首を洗って待つ…の心境であった。大多喜の殿は部下三百人を引き連れて颯爽とやってきた。部下はいずれも武器を手にし、身を固めている。澁刺としてい

るこの若い殿は、ひらりと馬から降りるとにつこり笑つてロドリゴに近づいた。そして手をさしのべ、握手を求めた。面食らつたロドリゴは、思わず両手で殿の手を包んだ。すると殿は片膝を折り、ロドリゴの手に接吻したのである。ロドリゴは驚きと共に涙を流した。殿は、ロドリゴを上座に着けると「大変な思いをしたな。ここに漂着したからには、わたしにお任せあれ。大御所、家康様もあなたを歓迎する。不足のものがあれば、遠慮せずにお申しよ。我々は村民共々、あなた方を護り、厚遇する」。それだけではなかつた。殿は豪華な刺繍を施した着物四枚、刀一振り、牝牛一頭、鶏数羽、果物、米醸造酒を携えて来たのである。「今後は、食料の全てを支給する」。そう言い残して、大多喜の殿は村民をねぎらい、さつさつと城へ引き上げていった。